

のあるものは、シンチグラム上集積し得ると思われた。
加えて、一部症例を供覧した。

13. 肺癌の骨シンチグラフィの読影上の問題点 ——手術症例による偽陽性例の検討——

桑田陽一郎 北垣 一 青木 理
末松 徹 坂本 武茂 大林加代子
高田 佳木 檜林 勇
(兵庫県成人病セ・放)
八田 健 坪田 紀明 (同・胸外)

肺癌の手術適応の決定に際して骨シンチグラフィは重要な検査法であるが、無病正診率の低さに問題がある。今回、原発性肺癌の手術症例に限定して、レトロスペクティブに骨シンチグラフィにおける偽陽性例について検討した。総計は101例であり、骨格系になんらかの異常がみられたものは59例で、うち骨転移は胸壁直達浸潤例が2例、術後の異常集積増大例が2例、術後の異常集積出現例3例の計7例であった。他の94例はX線所見や臨床経過により、骨転移はないものと考えられている。従来の報告より大幅に偽陽性例が多いのは、最近の装置の進歩と斜位像の追加など測定法の工夫によりごくわずかの activity の差異も描出可能となったためと考えられる。また異常集積部位の内訳は肋骨28例(47.5%)、腰椎25例(42.4%)、下肢19例(32.8%)、以下胸椎、上肢、頭蓋骨の順であった。腰椎、四肢、関節ではX線像、CTである程度転移を否定しえたが、肋骨は脊椎骨とともに気管支静脈と脊椎静脈叢間の分節的連絡により肺癌の骨転移の好発部位でもあり、骨シンチグラフィ上の異常集積の個数、形態、程度だけでは骨転移の判定は困難であると考えられた。実際の読影では単発あるいは集積程度の低いホットスポットは骨転移としないことにより、無病正診率を上げるのが適当であると考えられた。

14. 骨シンチにて異常集積を認めた筋断裂の1例

松田 昌弘 奥野 宏直 石川 博通
玉田 善雄 (日生病院・整形外科)
中井 俊夫 日高 忠治 松本 茂一
(同・放)
酒井 健雄 (大阪市大・二病理)
越智 宏暢 (同・放)

^{99m}Tc リン酸化合物による骨外集積に関する報告は、腫瘍では乳癌、肺癌、神経芽細胞腫などで、また腫瘍以外では心筋梗塞、脳梗塞、骨化性筋炎などがある。今回、われわれは、 ^{99m}Tc -methylenediphosphonate を使用した骨シンチにて異常集積を認めた大腿四頭筋断裂の1例を経験した。症例は、19歳男性で、サッカーの後右大腿部疼痛が出現、その9日後、疼痛が増強し、腫脹も出現したため当科入院。入院時、右大腿に8cm×5cmの腫瘍が触れた。レ線像は異常なく、骨シンチにて右大腿中央に骨に隣接した骨外の異常集積像を認めた。手術所見は、中間広筋内に血腫と、断裂した筋肉の断端を認めた。病理組織は、線維性結合組織、軟骨組織、骨組織、筋組織と層状に配列した異所性骨化像であった。

本症例の骨シンチの骨外集積は、病理組織にて骨形成を認めているので、hydroxyapatite とリン酸化合物の親和性に関与しているものと考ええる。また異所性骨化にて、レントゲン像にて石灰化を認めない早期では、骨シンチは有用な検査の1つと考える。

15. 骨シンチで経過観察中の Albright 症候群の一例

八幡 訓史 佐崎 章 木田 彰雄
小泉 義子 福田 照男 大村 昌弘
浜田 国雄 越智 宏暢 小野山靖人
(大阪市大・放)

Polyostotic fibrous dysplasia を伴う Albright 症候群の一例で、5年以上にわたって、その骨病変の進展を骨シンチグラフィで経過観察したので報告した。症例は9歳6か月の女児で、主訴は皮膚色素沈着、性器出血である。家族歴、既往歴に特記事項はない。生下時より左背部の辺縁鋸歯状の皮膚色素沈着 (café-au-lait spots) があり、生後6か月には性器出血が出現した。3歳頃から乳腺肥大が高度となり、左前額部の突出も認められるようになった。臨床検査所見上は、Al-P や estrogen の高値がみ